

石和温泉の旅 2021



2021年5月

旅のチカラ研究所 植木圭二

私たち夫婦と息子と孫の4人で山梨県笛吹市の石和（いさわ）温泉に行ってきた。この旅のきっかけは笛吹市の観光支援策で宿泊費の補助がもらえるということだったが、旅は思わぬ展開になっていった。

■旅のきっかけ

新型コロナウイルス感染症（以下コロナ）のために全国の温泉地は閑古鳥が鳴いている。今回の旅は石和温泉のある笛吹市が観光支援策で期間限定ながら宿泊割引をしているという情報を知ったことがきっかけだ。

その支援策は市外や県外の宿泊者に対しても宿泊費を補助するというもので、宿泊費1～2万円では5千円の補助、2万円以上で1万円の補助がでる。つまり1万円、あるいは2万円をちょっと超える宿泊ならば実質半額になるというもので実にありがたい。

私がこの支援策を知ったのは息子の嫁（義理の娘）の実家が笛吹市にあり、そこからの情報だった。実は息子たちは子連れの1泊旅行を計画しており、それならば私たち夫婦はそれとは全く別に宿を取って2泊旅行を計画した。

ところが義娘が体調を崩したために旅行に行くことができず、息子と1才10カ月の孫も私たちの旅に合流して3世代4人の石和温泉2泊3日の旅になった。

■ホテル千石

初日に泊まる宿「ホテル千石」は石和温泉街のほぼ真ん中に位置しており、温泉街を見て回るのもワイナリーで試飲するにも歩いて行ける便利な場所にある。平日ならば1万円ちょっとというお値打ち価格で泊まれて、今回の補助金をもらうには都合がいい。

そしてこの宿を選んだ理由は、実はもう一つある。それは義娘がかつて勤めていた宿で、彼女はここのフロントで働いていた。もちろん当初は私たち夫婦だけ泊まるつもりで、いわばお忍びで泊まろうとしていたが、その夫と子供が一緒になったので手土産を持参して「実は私たちはこういうもので、その節は嫁が大変お世話になりました」と挨拶し、彼らを紹介したから宿の受付では驚きの声があがり、そして案の定「この子が、あの娘の・・・」となった。

ロビーは広くて天井も高く解放感がある。宿泊客はコロナの影響か私たち以外には見当たらない。

孫は1才10カ月の男の子で、いたずら盛りなのでロビーを走り回っている。この宿は孫にとってはもってこいのように、宿選びは成功したように感じられる。彼にとっては非日常の異空間を存分に楽しんでいるようだ。

宿選びのセオリーは、泊まる目的、誰と泊まりかが最も重要なポイントだと改めて感じるようになった。

義娘の話ではホテル千石は団体客が多く泊まっていたという。ロビーにいたちょっと年配の従業員に聞いてみると、インバウンドの外国人団体客ではなく国内それも学生などの若い人たちの団体が多く利用してくれているという。

私たちは12畳の部屋に案内された。確かに団体客向けの造りをしており、当然のように孫は走り回っている。



【ホテル千石のロビー】

大浴場に行ってみると脱衣カゴの数が多し。湯船もそれなりに広く、それにも増してカランの数が多い。やはり団体客対応の宿というのが理解できる。

湯船の壁には滝が落ちている大きな絵が描かれている。ここまではよくある光景だが、その絵の滝が流れ出る場所に本物の滝の出口があって、そこから水が勢いよく出て滝になって湯船に落ちている。もちろん単なる水ではなく温泉のお湯の滝で、よくある“打たせ湯”のようなものを想像するといいかも。ただ打たせ湯よりもはるかに勢いがあり、それは滝行と呼べるほどの勢いで、そのために滝が落ちている場所を中心に大きな波が立っている。私も今までそれなりに多くの温泉宿に泊まっており、いろいろな大浴場に入浴しているがこのようなアイデアは初めて体験する。



【大浴場の湯滝】

食事を終えて部屋でくつろぎの時間になる。

孫はまだものの分別がなく訳が分かっていないから、部屋の備品を壊すのではないかと警戒していろいろ片づけて手が届かないところに移動していたが、思わぬ盲点があった。

孫はテレビ台を兼ねた金庫の上に置かれた液晶テレビを倒すという暴挙にでた。それでもテレビが倒れただけで正常に映って壊れるまでは至らなかった。少し安心してテレビを消しておけば興味が消えていたはずらしいだろうとテレビを消したが、それもつかの間で、消えているテレビを金庫から引きずり下ろした。この時に金庫の角にテレビ画面が当たって液晶パネルにヒビが入るといふ事態になり、電源を入れても画面はその破損部分を中心に縦横のスジが入ってしまい、完全に使い物にならない。

この弁償費用はどのくらいかかるのだろうか、それは旅行保険で出るのだろうか、何と言って切り出そうかなどと大人3人で考えているが、犯人の孫はさらにいたずらを楽しんでいる。

翌朝、チェックアウト時に正直にありのままに事態を伝えて謝罪し弁償する旨を伝えたが、宿の対応に私たちは驚いた。

フロントの若い男性従業員は「弁償は結構ですよ、宿の方で処理しますからご心配なく」と言ってくれている。私は「処理って？保険ですか？」と聞き返すと、「そんなようなものですから・・・ご心配なく」とその対応が手慣れた感じで、あまり驚いている様子もなく、少なくとも怒っていない。淡々と対応している感じが、何故か私たちは安心させてくれた。

若者の団体客が多いと備品の破損などいろいろなことがあるのだろうが、やはり旅行先でいやな思い出を残さないという宿の配慮だろう。私も妻もそれでは申し訳ないと弁償を再度申し出るが、宿の対応はもう変わらないようなのでありがたく甘えることにした。

それだけでなく手土産まで頂いたから、本当にありがたい。

■勝沼ぶどうの丘

甲州市にある「勝沼ぶどうの丘」にやって来た。私のかすか記憶では昔は勝沼町という町だったが甲州市になっている。調べてみると 2005 年にその勝沼町と大和村、塩山市がいわゆる“平成の大合併”によって一緒になって甲州市が誕生した。

この施設は“ぶどうのテーマパーク”とでもいうもので、小高い丘の上にホテル、レストラン、イベントホール、BBQ レストラン、温泉施設、地下ワインカーブなどが揃っている。

ワインカーブとはワインの貯蔵所で、ワインセラーとは何が違うのだろうかと思って調べてみると実はこの 2 つの言葉はフランス語か英語かの違いだけでどちらもワインの貯蔵庫を意味している。ただしワインセラーは人工的にワインを貯蔵するものに多く使われ、ワインカーブは洞窟などの自然環境でワインを貯蔵するニュアンスが強い。カーブというと少し分かり難いがケーブ、つまり Cave で洞窟の意味だ。

ぶどうの丘は施設全体が小高い丘の上にあるので、展望カフェからの眺望はなかなかのもので BBQ 会場からの眺めもよい。BBQ を楽しみワインを飲むのならば自動車ではなく鉄道で来たいが、JR 勝沼ぶどう郷の駅から近くアクセスも良い。



【2階の展望カフェからの眺望】

■笛吹川フルーツ公園

山梨市にある「笛吹川フルーツ公園」にやって来た。私はここには何度も来ており、いつ来ても大きくて素晴らしい施設に感激してしまう。ここからの景色も良くて、眼下に甲府盆地を見てその向こうに富士山も見ることができる。そして入場も駐車場も無料なのも実にありがたい。この公園の詳細は「石和温泉の旅 2019」、「甲斐の旅 2019」で書いている。

今は花の季節なので見事に花が咲き誇っている。アスレチックもあって、小さい子供たちが遊ぶにはもってこいで、孫はこの広い公園を走り回っている。1才10カ月の孫には少し早いですが、親水公園もあって多くの子供たちが存分に水と戯れている。



【笛吹川フルーツ公園の花壇 背後はくだもの広場のドーム】

ついでにフルーツ公園から少し登った所にある「ほったらかし温泉」と「ほったらかしキャンプ場」にも立ち寄る。私は既に何度か来ているが、息子が見たことがないというので車窓見学だけがやって来た。

息子はキャンプ場のロケーションについて相当に感激しており、ここはフルーツ公園よりも高い位置にあるので甲府盆地も富士山もさらによく見ることができる。

■ 桔梗屋

笛吹市の一宮にある信玄餅で有名な桔梗屋の工場は「桔梗信玄餅工場テーマパーク」という施設になっており、とても賑わっている。その賑わいの原因の一つが信玄餅の詰め放題というイベントで、テレビでもよく紹介されている。普通の人ならば10個くらいは楽に詰めることができ、ビニール袋いっぱいでも220円というから1個20円ということになり、とても人気がある。私たちが訪れたのは午前中だったが、それにも関わらず既に本日分は終了していた。

その他にもこの工場で作っているケーキ、菓子、チーズなども格安で販売している。極めつけは社員食堂の弁当まで売店で販売しており、もちろんこれも格安で結構人気があるようで既に残りの個数が少ない。

■ 若い女性ターゲットの宿

翌日の宿泊は石和温泉街の外れにある「別邸 花水晶」という宿で、やや高級感がある落ち着いた雰囲気の小ぢんまりしたエントランスになっており、ロビーに入るとお洒落な雰囲気で満たされている。数年前にリニューアルしたようで若い女性客は喜びそうな造りになっており、宿泊客は若い女性グループが多い。完全に若い女性、それも個人客をターゲットにしていることがうかがえる。実はこの宿は義娘が一度は泊まってみたいと言っていた宿で、その理由が十分に理解できる。

部屋も風呂も同様なコンセプトが感じられるが、それは逆に幼い子が走り回るようにはできていないことを意味し、少なくとも子連れには向かないようだ。部屋に入ってまず息子と私がやったことは部屋の備品を全て片付けた。



【別邸 花水晶のロビー】

この宿の特徴の一つは“オールインクルーシブ”ということだ。つまりワインや生ビールなどのアルコールも含めドリンク、スイーツ、アイスクリームなどがチェックインからチェックアウトまで飲み放題、食べ放題でロビーやレストランからいつでも好きなものをとることができる。もちろん夕食の時間も飲み放題だ。酒飲みのおじさん相手ならば分かるが、スイーツやアイスクリームもあるというところが若い女性向きなのだろう。

部屋にはタオルしか置いておらず、櫛やシャワーキャップなどのアメニティ、浴衣、枕までも自由に選べるようになっている。そういえば大浴場の入口にシャンプー・バーもあって好きなシャンプーを使うことができる。これは若い女性客は喜びそうだ。

残念ながら部屋からの眺望は目の前の大きなマンションで完全に遮られている。それがなければ笛吹川の河原が見えているはずだ。おそらく目の前にマンションができたために眺望を奪われて、宿は従来のコンセプトを変えて若い女性ターゲットにしたのかもしれない。

夕食は猪肉の鍋と創作料理のようなものが並んでお洒落な器で出てきた。残念ながら小さな子供が食べるようなものは少ないので、若いスタッフがふりかけを持って来てくれた。それでもご飯が結構固くて孫は難儀していた。

少なくとも料理も食事処の雰囲気も、回りのお客たちも小さい乳幼児を想定していないようで、早々に部屋に引き上げることになった。

それにしてもオールインクルーシブはいけない。つつい飲んでしまう。夕食時に飲み放題という宿はよくあるが、チェックアウトまでというのはあまりお目にかからない。

結局私は朝食の時にも風呂上りの生ビールを飲んでしまい、息子に運転を頼んだ。やはり飲み過ぎで、今後はオールインクルーシブには要注意だ。

■2 度目の訪問

かくして石和温泉の旅は終わった。

しかし旅行から帰宅し数日たった後、笛吹市の宿泊割引は今月末までということとテレビを壊したお詫びで、私たち夫婦でホテル千石に長期滞在する旅を思いつき、すぐに実行に移した。

前回、宿の人から「直接予約してもらえばもう少しサービスできましたのに」という言葉が私の脳裏に残っており、今回は宿に電話をかけて予約した。楽天やじゃらんなどのインターネットの予約専用サイトから予約すると手数料が発生し、それは宿泊客ではなく宿が負担する。サイトによって金額は異なるが宿泊費の 10～20%になる。そういう仕組みなので電話で直接予約するのが価格交渉の余地がある。そのことは知っていたが前回は諸事情によりサイト予約にしていた。

今回はできれば一週間くらい滞在したかったが、今月末で宿泊割引期間が終了するということで 3 泊にし、パソコンを持ち込んで温泉旅館で仕事をしながらの滞在となった。従って観光は初日の移動ルート上にある名所旧跡に車で立ち寄る程度にした。

■猿橋

山梨県の大月市の猿橋にやって来た。昔の甲州街道に架かっている橋で、長さ約 31m、幅約 3m、水面からの高さ約 30m で深い谷間のために橋脚はない。従って鋭くそびえたつ兩岸から四層に重ねられた芻木（はねぎ）とよばれる支え木がせり出しており、猿が互いに体を支えあって橋を作っている様子に似ていることで、その名前がついたようで日本三奇橋の一つになっている。

猿橋ができた年代は不明で、伝説によると推古天皇つまり 600 年頃というから相当に古い。もちろん以降何回も架け替えが行われており、現在の橋は 1984 年に架けられたと説明看板にある。



【猿橋】

猿橋の前に大黒屋という旅館がある。何の変哲もない小さな旅館でコロナのために現在休館中だが、宿の前で面白い看板を見つける。

読んでみると渋沢元治という人の日記らしい文章で、「仕事で中央線に乗っていたら車内で旧友（小平浪平）と偶然に再会し、あまりに懐かしいので途中下車してこの旅館に泊まって語り明かした。その時に旧友はこれから本邦で電気製作事業を起こすという抱負を語っていて、この旧友が後に日立製作所の創業者になった小平浪平だ」と書かれている。

電気メーカに勤めていた私にとってはとても興味深い話で少し感激したが、妻はそっけない様子だった。この看板は日立製作所の特称会という組織が寄贈している。

■勝沼トンネルワインカーブ

「勝沼トンネルワインカーブ」にやって来た。前回行った勝沼ぶどうの丘にもワインカーブがあってワインカーブは自然の洞窟などを利用してワインを貯蔵すると書いたが、ここはトンネルを利用した貯蔵施設で、廃線で使われなくなった旧国鉄のトンネルを利用している。

トンネル入口にはワインカーブ駅舎という管理施設があり管理人がいて、ありがたいことに管理人がトンネル内を案内してくれるという。鉄製の頑丈な扉を開けてトンネル内に入るとひんやりとした冷気が私たちを迎えてくれて、このひんやり感がなぜか気持ち良い。

管理人の話では、このトンネルは1903年（明治36年）に建造された深沢トンネルで、レンガ積みの1100mのトンネルは鉄道文化の遺産としても貴重で、年間を通じて温度は13℃以下に維持されており、ワインの長期熟成にも最適な条件だという。

入り口付近はこのトンネル貯蔵庫にワインを預けている一般の人用のワイン棚があって、その遙か向こうにも扉があってその扉の奥は業者用のものになっている。約100万本を貯蔵することができるというから凄い。残念ながら見学はこの入口付近のみだが、ワイン棚が延々の続いているだけなので見てもしょうがないのかもしれない。



【トンネルワインカーブの中 照明をつけてくれたので明るい】

それにしても廃線のトンネルがこのような第二に人生を送っているというのはあまり見たことがない。普通ならば埋められるか閉鎖されて朽ち果てるのを待つだけなのに、静かな余生を送りながら人々の役に立つというのはトンネルにとっても有意義な老後になっているように感じた。

さらにこの施設は甲州市が管理しており見学料が無料なのもありがたい。

おっと、ワインを預ける費用を聞くのを忘れた。インターネットで調べてみると利用者の話では 60 本預けて月に 2500 円とあった。

■今度は連泊

ホテル千石に 3 週間ぶりにやって来た。まずはフロントで前回のお詫びを言い、その気持ちを含めて手土産を差し出す。フロントにいたのは前回のチェックアウト時に対応してくれた若い男性で、彼はお気遣いなくとのことだが、こちらはテレビ 1 台壊しているのだから「とにかく気持ちですから」と言って手渡した。

ホテル内の様子は前回来た時と変わっておらず、コロナの影響で宿泊客はいまだに少ない。それでも〇〇高校剣道部の宿泊が看板に書かれており、その看板を見てなぜか私は嬉しく思ってしまった。さらに妻は私よりも喜んでいる。私たち夫婦はいつの間にか旅館側の人間になっている。

これから 4 日間、温泉三昧の日々が始まる。

■街を散策

昼食は宿に頼んでいないので昼時には腹を減らすための散歩を兼ねて石和温泉街、笛吹市の繁華街を散策する。

丸亀製麺があると聞いていたので、宿から丸亀製麺まで約 2.5km の距離は運動にはちょうど良く歩き始める。実は昨年 12 月に四国お遍路の旅をした時に本場の讃岐うどんを何食か食べてから私たちは讃岐うどんファンになっていた。丸亀製麺は全国チェーン店ではあるが、本場で食べる味に近く、注文や会計のセルフシステムも本場と同じなので、私たちは自宅近くにある丸亀製麺に結構通っていた。

宿は温泉街のほぼ真ん中にあり、丸亀製麺は南西の端にあるので、少し寄り道をしながら歩くと石和温泉街の半分を見物できる。市街地の南部の笛吹川沿いには笛吹市役所もあるので笛吹市の中心部と言ってもいいだろう。

駅の近くの広い敷地にユニークな形の建造物を造っており、驚いたことに看板を見ると公園になるらしい。前回行ったあの素晴らしい笛吹川フルーツ公園も近郊にあるのに、ここにも大きな公園を造るとは人口 7 万人の都市とはとても思えない。もっとも笛吹川フルーツ公園は笛吹市内にないから行政的には関係ないのだろう。公園は結構広い敷地で完成予想図には親水公園もあるようなので孫を連れてきたら喜びそうだと妻は話している。

笛吹市の中心部を歩いていると店は何でもそろっていることに気が付く。丸亀製麺もそうだが、イオンモールやドンキ・ホーテ、アピタ（ユニー）、大手回転すしチェーン、大手ファミリーレストランなど都会で見かける大規模チェーンの店舗はほとんどあり、それらに加えて山梨の地元の店や観光客向けの施設が点在している。人口 7 万人で消費できるのか心配になるほどだ。

■御朱印公園

御朱印公園と珍しい名前の公園が住宅地の中にあり、木々や芝生に囲まれた親水公園のような施設で、それに隣接して八田家書院という古風で立派な屋敷がある。この屋敷の前で写真を撮っていると受付の女性に声を掛けられたので、私は御朱印公園という名前は寺社でもらう御朱印と関係があるのかと名前の由来をこちらから聞いてみた。彼女は寺社の御朱印ではなく、かつての朱印船貿易が時の権力者からのお墨付き（御朱印状）により貿易が認められたように、御朱印状によってこの土地の所有を認められたことだと説明してくれた。

武田家が滅亡し徳川家からの御朱印状によりこの一帯の土地を安堵された八田家がこの公園と屋敷の土地も所有していたが、現在は公園部分を笛吹市が、屋敷部分を八田家が所有しているという。屋敷は古いが由緒あるものらしく、彼女の説明では関ヶ原の合戦の翌年の 1601 年に建てられた貴重なもので、有形文化財に指定されているとのことだ。築 400 年以上と聞くとその威風堂々とした姿に、より一層の存在感を感じる。

彼女とは公園の名前の話から始まり、私たちが石和温泉に連泊していることで温泉や旅行の話になって、彼女も旅行好きということで旅行話に花が咲いた。名前によって旅は広がり勉強にもなった。私は常々ネーミングの重要性を書いているが、改めてそれを感じた。



【御朱印公園】



【八田家書院】

■さくら温泉通り

翌日は街の東半分を散策するため温泉街を流れる近津川の両岸の「さくら温泉通り」にやって来た。近津川は小さな用水路で川幅は 3~4m、両岸に桜の木を植えてあり雰囲気も良く、片道約 1km なので散歩するにはその距離もちょうど良い。夜間照明設備もあり桜の季節は夜桜見物で賑わうのだろうと妻と話しながら歩き始める。

1961 年（昭和 36 年）に地元のバス会社が井戸を掘っていたら突如高温の温泉が湧き出て、湯量豊富なためぶどう畑に流れ出したというのが石和温泉の始まりで、この辺りがその場所だ。

そういえばこのさくら温泉通り近辺はかつて笛吹川が流れていた場所で、昨日の八田家書院の彼女が見せてくれた地図ではそうになっていた。そもそも笛吹川は昔から北に南に移動していたと言われている。笛吹川以外にも大きな川が流れ込む甲府盆地は昔から水害で悩まされており、そのために武田信玄は治水を重んじ、信玄堤などを造った。笛吹川は明治時代に現在の場所を流れるようになったというが、恐らく秩父山地にしみ込んだ地下水もこの付近の地下を流れているので石和温泉が湯量豊富な理由が分かった気がする。



【近津川 両岸の道が「さくら温泉通り」】

■土産

宿で過ごしていると多くの従業員から「501号室にお泊りの植木様ですね、お土産ありがとうございます、美味しくいただきました」などと声を掛けられる。それは当たり前といえばそれまでだが、従業員教育なのか、この地方の人々に日常的にしみ込んだ感謝を忘れない気持ちの表れなのだろうか、実に気持ちよく過ごすことができた。

長期滞在旅行に手土産は意外に良いコミュニケーションツールかもしれない。

温泉三昧の日々に毎日豪華な食事を食べた。妻は料理について比較的詳しい方で、今回の料理について味はもちろん、皿や器が素晴らしいとか、3日間の夕食で同じ料理が出てこないとか、いいことばかりを言っており、完全にこの宿のファンになったようだ。

そんな風にファンになると相手もその気持ちを感じてくれるのだろうか、チェックアウトの時に宿からまた土産をもらってしまった。何と申し訳ない。これはまた来ないといけないと妻と話しながら宿を後にした。

何も予定を立てないでのんびりと一週間くらい滞在する温泉旅はなかなか面白い。ただしそれには安らぎの宿、ぶらりと散策に出ても楽しめる土地というのも条件になるだろう。

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合って各項目を5段階で評価し、委員会として評価値を算出する。

評価の基準は、5は驚き感動、4は普通に良い、3は可もなく不可もない、2は普通に悪い、そして1は失望落胆としている。

総合点（平均値）で5段階の75%、つまり3.75をオススメの目安としている。特に4.0を超えるには驚き感動が少なくとも1項目以上あるからオススメ度は高い。

「ホテル千石」は泉質3、風呂3.5、料理4.5、コスパ4、サービス5、建物・部屋3、立地環境3、総合点3.71になった。料理4.5は妻の押しで、サービス5の理由はテレビ破損の対応に感激したからだ。

泉質は低張性アルカリ泉、pHは9.1、湧出温度は45.7℃となっている。

「別邸 花水晶」は泉質3、風呂4、料理4、コスパ3、サービス4、建物・部屋4、立地環境2、総合点3.43になった。このような顧客ターゲットが明確な宿はそのような顧客（若い女性）が評価すれば点数はもっと高くなるはずだ。立地環境は目の前のマンションのために低くなった。

泉質は低張性アルカリ泉、pHは9.1、湧出温度は45.9℃となっている。

■旅の記録

一回目の実施は2021年5月7日（金）～9日（日）の2泊3日、その行程を以下に示す。

- ・1日目 昼過ぎに車で自宅出発、16時に石和温泉「ホテル千石」にチェックイン
- ・2日目 10時に宿を出発、勝沼ぶどうの丘、桔梗屋、笛吹川フルーツ公園
15時30分に「別邸 花水晶」にチェックイン
- ・3日目 10時に宿を出て約2時間後に帰宅

一回目の費用は大人3人と乳幼児1人で合計約6万円になった。

- ・ホテル千石 16800円（1泊2食付10600円×3=31800円 笛吹市宿泊割15000円）
乳幼児の入館料2000円はサービス
- ・別邸 花水晶 33150円（1泊2食付21350円×3=63150円 笛吹市宿泊割30000円）
- ・昼食代、飲み物など 約3000円
- ・交通費約6800円（高速道路4500円、往復約200kmのガソリン代約2300円）

再訪は2021年5月28日（金）～31日（月）の3泊4日、その行程を以下に示す。

- ・1日目 昼過ぎに車で自宅出発、猿橋と勝沼トンネルワインカーブを訪問
16時に石和温泉「ホテル千石」にチェックイン
- ・2日目 昼時の散歩を兼ねて石和温泉街散策（主に西部、御朱印公園や八田家書院など）
- ・3日目 昼時の散歩を兼ねて石和温泉街散策（主に東部、さくら温泉通りなど）
- ・4日目 7時30分に宿を出て約1時間半後に帰宅

再訪の費用は夫婦2人で約4万7千円になった。

- ・ホテル千石 34900円（平日1泊2食付10150円が2日間、土曜日は12150円、
夫婦二人で3日間64900円、ここから笛吹市宿泊割30000円を適用）
- ・夕食時の飲み物代や昼食代など約6000円
- ・交通費約6300円（高速道路4000円、往復約200kmのガソリン代約2300円）